〈訳注〉

漢代和蕃公主に関する諸史料の訳注

―『史記』『漢書』『後漢書』『資治通鑑』より―

菅沼愛語

和蕃公主の降嫁政策は漢・隋・唐が用いた重要な外交の一形態であり、近年、注目されて研究[1]も多彩である。筆者も和蕃公主研究の基礎作業として、これまで隋・唐の和蕃公主に関する諸史料（『隋書』『旧唐書』『新唐書』など）の訳注を行ってきた[2]。本稿では和蕃公主政策の嚆矢となる漢の和蕃公主を取り上げ、漢代和蕃公主に関連する諸史料（『史記』『漢書』『後漢書』『資治通鑑』）の訳注を試みたいと思う。

漢代の和蕃公主としては、高祖から武帝までの歴代皇帝が匈奴単于に対して降嫁させた公主達（宗室の娘）[3]、武帝が対匈奴同盟のために烏孫に降嫁させた二人の公主（江都公主と解憂公主）[4]、元帝が入朝した呼韓邪単于に賜った宮女の王昭君[5]が挙げられる。

なお、公主ではないが、昭帝が鄯善（旧名楼蘭）の王に妻として賜った宮女[6]、宣帝が公主の称号を授けた亀茲王の妻[7]も、漢の公主降嫁政策を解明するための重要な事例であると考えるので、本稿では関連史料を取り上げ、訳注を施す。また、公主降嫁政策の契機となる劉敬の建策、烏孫への公主降嫁の意義を説く張騫の建策も取り上げ訳注を行う。

漢代の公主降嫁は時期によって意義や性格が異なるので、最初に、漢の外交関係、特に重要な匈奴との関係を中心に

概観しておくと、便宜上、以下の三つの段階に大別することができる。第一段階は、紀元前二〇〇年の白登山の戦いでの高祖の敗北から、元光二年（前一三三）の馬邑城事件[8]を契機とする漢・匈奴間の全面戦争勃発までの時期である。この時期、劣勢にあった漢は匈奴に対して屈辱的な和親策を実施し、高祖から武帝（治世初期）までの歴代皇帝が、漢王室の娘を公主と称して単于に降嫁させ、和平の維持につとめた。第二段階は、元光二年から甘露三年（前五一）の呼韓邪単于の入朝までで、当該期には武帝による度重なる討伐によって匈奴は混乱・分裂し、宣帝期に呼韓邪が入朝した。この時期、武帝は張騫の建策に従い、対匈奴のために烏孫と友好関係を樹立し、江都公主と解憂公主を烏孫王に降嫁させた。当該期には漢と西域諸国との交流も始まったが、西域は匈奴の勢力圏にあった[9]ため、漢は西域の掌握を画策し、昭帝は鄯善王に宮女を妻として授け、宣帝は亀茲王の妻弟史に公主の称号を与えて親善強化を図った。第三段階は甘露三年の呼韓邪の入朝以降である。当該期の匈奴は漢に臣従し、新の始建国三年（西暦十一年）までの約六十年間入寇しなかった。この時期、元帝が呼韓邪に対し王昭君を妻として授けた。以上の三つの段階に沿って公主達の降嫁年・降嫁先などを『史記』『漢書』等から抽出し整理したものが【表】、烏孫へ降嫁した公主達の婚姻状況などをまとめたものが【系図1】、王昭君の婚姻状況をまとめたものが【系図2】である。

漢の和蕃公主については、降嫁先の周辺国の伝（『史記』匈奴伝、『漢書』匈奴伝・烏孫伝、『後漢書』南匈奴伝など）[10]、皇帝の本紀（『漢書』恵帝紀など）、『資治通鑑』などに記載がある。ただ記述内容が重複する場合もあるので、本稿では翻訳を省略することもある。使用するテキストは、中華書局の標点本（史記一九五九年版、漢書一九六二年版、後漢書一九六五年版、資治通鑑一九五六年版）である。

なお、漢代和蕃公主に関する重要な婚姻習俗「レヴィレート婚（嫂婚制）」について述べておく。匈奴・烏孫には、父兄の死後、息子や兄弟が継母や兄嫁を娶るレヴィレート婚[11]の風習があり、烏孫に降嫁した江都公主と解憂公主、匈奴

【表】漢の和蕃公主

	皇帝	降嫁年代	公主の名と出自	降嫁先	子供	典拠
第一段階	高祖	高祖9(前198)	公主(宗室女)	匈奴：冒頓単于	なし	史記110匈奴伝, 漢書94匈奴伝上, 資治通鑑12
	恵帝	恵帝3(前192)	公主(宗室女)	匈奴：冒頓単于	なし	漢書2恵帝紀, 資治通鑑12
	文帝	文帝6(前174)	公主(宗室女)	匈奴：老上単于	なし	史記110匈奴伝, 漢書94匈奴伝上, 資治通鑑14
	景帝	景帝5(前152)	公主	匈奴：軍臣単于	なし	史記110匈奴伝, 漢書5景帝紀, 94匈奴伝上, 資治通鑑16
	武帝	元光2(前133)以前	女	匈奴：軍臣単于	なし	漢書6武帝紀
第二段階	武帝	元封3(前108)頃	江都公主(江都王建の娘)	烏孫：昆莫	なし	漢書96西域伝下烏孫伝, 資治通鑑21
		元封末(前105)頃		烏孫：岑陬	少夫	
	武帝昭帝宣帝	太初2(前103)頃	解憂公主(楚王戊の孫)	烏孫：岑陬	なし	漢書96西域伝下烏孫伝, 資治通鑑24, 27
		太始年間(前96〜93)		烏孫：肥王	元貴靡・万年・大楽・弟史・素光	
		神爵2(前60)		烏孫：狂王	鴟靡	
	昭帝	元鳳4(前77)	宮女	鄯善：尉屠耆	なし	漢書96西域伝上鄯善伝, 資治通鑑23
	宣帝	地節4(前66)	弟史（解憂公主の長女）	亀茲：絳賓	丞徳？	漢書96西域伝下渠犂伝, 資治通鑑25
第三	元帝	竟寧元(前33)	王昭君	匈奴：呼韓邪単于	伊屠智牙師	漢書9元帝紀, 漢書94匈奴伝下, 後漢書89南匈奴伝, 資治通鑑29, 30
	成帝	建始2(前31)		匈奴：復株累単于	須卜居次・当于居次	

※江都公主と解憂公主の降嫁年代は王明哲氏の考証（王明哲『烏孫研究』新疆人民出版社、1983年）に基づいた。

に嫁した王昭君は、夫の死後などに、その後継者と再婚した。

一、公主降嫁の開始・高祖八年（前一九九）劉敬による公主降嫁政策の提言【第一段階】

白登山の戦い（前二〇〇年）の後も匈奴が入寇を繰り返したので、高祖が劉敬に匈奴対策を問うと、劉敬は公主降嫁政策を進言した（前一九九年）[12]。劉敬の提言は『史記』巻九九劉敬伝、『漢書』巻四三婁敬（劉敬）伝、『資治通鑑』巻十二、高帝八年（前一九九）条に記載があるが、『漢書』『資治通鑑』は『史記』とほぼ同文であるので『史記』のみを取り上げる。

・『史記』巻九九、劉敬伝

この当時、匈奴では冒頓[13]が単于となり、兵士は強く、弓矢の得意な兵士の数は三十万[14]もおり、頻繁に北の辺境地帯を攻撃し苦しめた。高祖は事態を憂い、劉敬に匈奴対策をたずねた。劉敬が「天下はようや

く安定し、兵士は戦争をやめたばかりですから、武力を行使して匈奴を屈服させることはまだできないでしょう。冒頓は父を殺して、代わって即位し、父の大勢の妻達をおのれの妻となし、力によって威勢を振るっていますから、仁義を説いて匈奴を臣従させることもまだできないでしょう。ただ、わたしには遠い未来にまで匈奴の子孫を漢の臣下となすための計略を進言することだけはできます。しかし、恐れながら、陛下には、この計略を実行できないと存じます」と言うと、高祖は「そなたの計略が良計であれば、どうして朕に実行できないことがあろうか。どうすればよいのか」と言った。劉敬は答えて、「陛下が、本当に長公主（嫡出の長女）の魯元公主様を単于の妻となし、手厚い贈物を授けることができれば、単于も漢の公主の贈物が手厚いことを知り、匈奴は蛮夷ですので（利があると判断すれば）必ず漢を慕って公主を閼氏[15]（単于の妃）にするでしょう。男子が誕生すれば、その子を必ず太子に立てるでしょうし、冒頓の死後には、この子が代わって単于になるでしょう。それはなぜかといえば、匈奴は漢から貰える手厚い贈物を貪りたいからです。ですから陛下は、季節ごとに漢では余っているが匈奴では乏しい贈物を与え、弁舌にすぐれた人物を派遣して、礼節を説いて穏やかに匈奴を諭すのです。冒頓が生きている間はもちろん陛下の女婿でございますし、冒頓が死ねば陛下の外孫が匈奴の単于になります。外孫で、あえて祖父に対して対等の礼を取ったものを聞いたことがありましょうか。このような方法で、匈奴を、武力を行使せずとも徐々に臣従させることができるでしょう。それでも、もし陛下が魯元公主様を匈奴に遣わすことができず、漢王室の娘や後宮の女を偽って公主と称して匈奴に派遣されるのであれば、匈奴もまた実態を知って、漢のことを尊重して親善を深めたいとは思わないでしょう。それでは公主降嫁政策も無益となりましょう」と言った。高祖は「よかろう」と言って魯元公主を匈奴に遣わそうとしたが、母親の呂后が日夜泣いて、「わたしには、ただ太子が一人、娘が一人しかいないのに、どうして大切な一人娘を匈奴に棄てることができましょうか」と言い続けたので、高祖はとうとう魯元公主を匈奴に遣わすことができず、漢王室の娘を選んで公主を名のらせ単

于の妻とすることにした。そして、劉敬を匈奴に行かせ単于と和親の盟約を結ばせた。

二、匈奴への公主降嫁（高祖から武帝まで）【第一段階】

（一）高祖

・『史記』巻一一〇、匈奴伝（『漢書』巻九四上匈奴伝上にもほぼ同文があるが省略）

このとき匈奴では漢の将軍達が数多くやって来て降伏するので、冒頓単于は常に漢の辺境地帯に往来し、代の地（山西省）に侵攻し略奪した。そのため漢は匈奴の襲来を憂慮し、高祖は劉敬を匈奴に派遣して、漢王室の娘を公主と称して単于の閼氏となし、毎年匈奴に対して、絮（綿）、絹、酒、米、食べものを、それぞれ数量を決めて授けることとし、冒頓単于と兄弟の盟約を結んで和親した。[16] 冒頓単于はそこで漢への侵攻を少し止めた。

・『資治通鑑』巻十二、漢紀四、高帝九年（前一九八）条

高祖の九年（前一九八）冬、高祖は漢王室の娘を長公主となし、匈奴単于の妻として、劉敬を派遣して匈奴に行かせ、冒頓単于と和親の盟約を結ばせた。

（二）恵帝

・『漢書』巻二、恵帝紀、三年（前一九二年）条（『資治通鑑』巻十二、恵帝三年条にも同文があるが省略）

恵帝の三年（前一九二年）…恵帝は漢王室の娘を公主となし匈奴の冒頓単于に嫁がせた。

（三）文帝

・『史記』巻一一〇、匈奴伝（『漢書』巻九四上匈奴伝上にもほぼ同文があるが省略）

冒頓単于が亡くなり、息子の稽粥が即位して老上単于[17]と称した。老上稽粥単于が初めて単于になると、文帝は、また

漢王室の娘を公主となして老上単于の閼氏とした。

・『資治通鑑』巻十四、漢紀六、文帝前六年（前一七四）条

冒頓が死去したので息子の稽粥が即位し、単于の称号を老上単于と言った。老上単于が初めて即位した時、文帝はまた漢王室の娘の翁主（公主）を遣わして単于の閼氏となした。

（四）景帝

・『史記』巻一一〇、匈奴伝（『漢書』巻九四上匈奴伝上にもほぼ同文があるが省略）

文帝の後元四年[18]（前一六〇）、老上稽粥単于が亡くなり、息子の軍臣が即位して単于となった。軍臣単于[19]がすでに即位すると、文帝はまた匈奴と和親した。…文帝が崩御し、景帝が即位した（前一五七年）。…景帝はまた匈奴と和親すると、国境に関市（交易場）を開き、物資を匈奴に送り、公主を匈奴に遣わし（軍臣単于に嫁がせ）たが、それは故約[20]の通りのことであった。

・『漢書』巻五、景帝紀、五年（前一五二）条

景帝の五年（前一五二年）…景帝は公主を匈奴の単于（軍臣単于）に嫁がせた。

（五）武帝

・『漢書』巻六、武帝紀、元光二年（前一三三年）条

元光二年（前一三三年）春、武帝は勅書を下し公卿に問うて「朕は女を飾って匈奴単于（軍臣単于）に娶せ、黄金・絹・刺繍を贈ってきた…」と言った。

三、烏孫への公主降嫁【第二段階】

武帝は匈奴への攻撃を激化させるとともに、対匈奴連合として烏孫に公主を降嫁させる。烏孫への公主降嫁を進言したのは、張騫であった。本章では、張騫の建策、烏孫王に降嫁した二人の公主（江都公主と解憂公主）を取り上げ、諸史料の訳注を行う。

（一）元鼎二年[21]（前一一五）、張騫の建策

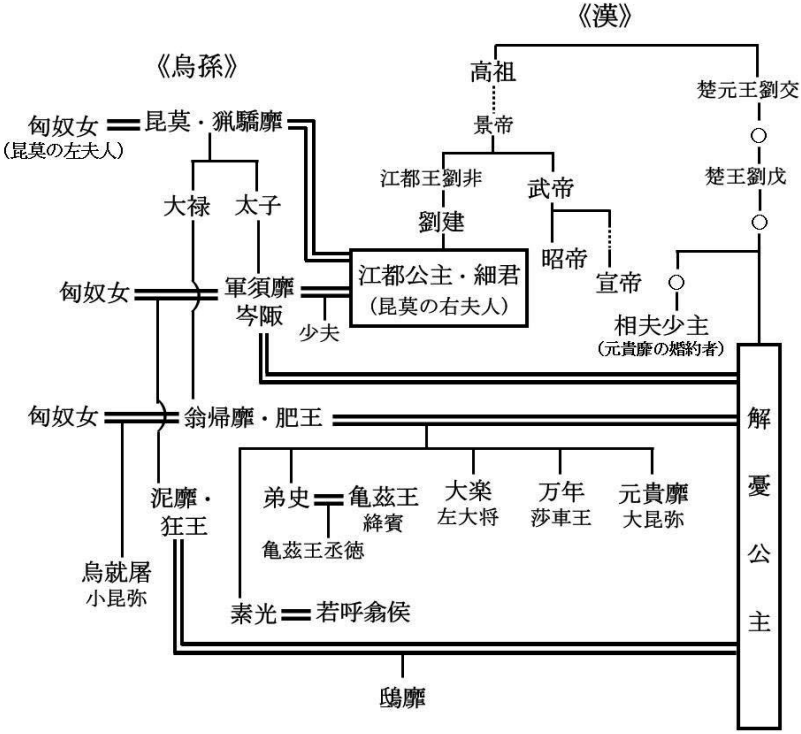
・『漢書』巻六一、張騫伝

張騫は武帝に対し、「…いま単于は新たに漢の攻撃に困り、烏孫王昆莫の旧領[22]には人が住んでいません。蛮夷は旧領を恋しく思い、また、漢の財物を貪りたいと考えていますので、いままさにこの好機を利用して烏孫に手厚い贈物を授け、招いて東方の故地に移住させ、漢から公主を遣わして烏孫王の夫人とし[23]、漢と兄弟の約定を結べば、万事において烏孫王は漢の命令を聞き、従うことでしょう。そうなれば、もはや匈奴の右臂を切断[24]したも同然です。烏孫と連合できれば、その西にある大夏などの諸民族もみな招来して漢の外臣となすことができるでしょう」と言った。武帝は張騫の意見を妥当であると考え、張騫を中郎将に任命した。…張騫は烏孫に到着すると、烏孫王に対して賜わり物を贈り、武帝の意図を諭したが、烏孫王はまだ（漢との和平を）決断できなかった。その経緯については『西域伝』に記した。

・『漢書』巻九六下、西域伝下、烏孫伝

初め張騫は、「烏孫は元来、大月氏とともに敦煌の周辺にいました。いま烏孫は強大ですが、手厚い贈りもので招いて東に移動させ、以前の領土に住まわせ、公主を娶らせて漢と兄弟になれば、匈奴を牽制することができましょう」と言った。詳細については『張騫伝』に記した。武帝は即位すると、張騫に黄金と絹を持たせて烏孫に派遣した。しかし、昆莫が張騫を謁見する際に、匈奴単于に対する時の儀礼にならったので、張騫はたいそう恥じ入り、「天子が賜わり物

【系図１】烏孫に降嫁した江都公主と解憂公主（漢・烏孫・匈奴の通婚状況）



を下されたのに、王は拝礼をしない。ならば、賜わり物をお返しいただきたい」と言った。すると昆莫は起立して拝礼した。…張騫はすでに烏孫王に賜わり物を贈ったので、武帝の意図を諭し、「烏孫が東に移動して故地に住めるのであれば、漢は公主を遣わして烏孫王の夫人となし、兄弟となりましょう。漢と烏孫が連繋して匈奴の侵攻を防げば、匈奴に破られる恐れはありません」と言った。しかし烏孫は漢から遠く、まだ漢の国土の大小も知らず、また烏孫が匈奴に近く、長きにわたって匈奴に服属していたので、烏孫の大臣達はみな東への移住を望んでいなかった。昆莫は年老いて、国も（三つに）分かれていた[25]ので、独断で烏孫を支配することができず、使者を派遣して張騫を見送らせ、さらに馬数十頭を漢に対して献上し、感謝の意を表明した。烏孫の使者は、漢の人民が多く、豊かに繁栄す

るさまを見てから帰国した。それ以降、烏孫はますます漢を尊重するようになった。

（二）江都公主・細君

江都公主は、江都王劉建[26]の娘である。また、公主の祖父江都王劉非は、景帝の子であり、武帝の異母兄弟であった[27]。江都公主は武帝の命により、はじめ烏孫の昆莫（獵驕靡）に降嫁し、後に昆莫の孫・岑陬（軍須靡）と再婚した（系図1参照）。

・『史記』巻一二三、大宛伝

博望侯の張騫が亡くなって以後、匈奴は漢が烏孫と通好していることを聞き、怒って烏孫を攻撃しようとした。漢は烏孫に使者を派遣し、烏孫の南に出て、大宛、大月氏に至る漢の使者も相次いだ。そこで烏孫は恐れ、漢に使者を派遣して馬を献上し、「漢の翁主（公主）を娶って、漢と兄弟になりたい」と請願した。武帝が群臣に下問して議論させると、群臣はみな、「必ず先に結納品を受け取ってから、翁主を烏孫に派遣するように」と言った。…烏孫は千頭の馬を結納品として贈り、漢の翁主を娶ろうとした。そこで漢は王室の娘の江都翁主を烏孫に行かせ、烏孫王の妻とした[28]。烏孫王の昆莫は江都翁主を右夫人とした。匈奴もまた娘を派遣して昆莫の妻としたので、昆莫は匈奴の娘を左夫人とした[29]。昆莫は「わたしは老いた」と言って、孫の岑陬[30]に命じて江都翁主を娶らせた[31]。

・『漢書』巻九六下、西域伝下、烏孫伝

匈奴は烏孫が漢と通好していることを聞き、怒って烏孫を攻撃しようとした。また、漢は烏孫に使者を派遣したとき、初めて烏孫の南に出て、大宛、月氏に到達し、互いに続いて交流が絶えなかった。そのため烏孫は恐れ、漢に使者を派遣して馬を献上し、「漢の公主を娶って、漢と兄弟になりたい」と請願した。武帝は群臣に下問し、議論して烏孫への公主降嫁を許可することとし、「烏孫は必ず先に婚姻のための結納を行うように。さすれば公主を烏孫に派遣しよう」

と言った。烏孫は馬千頭を結納品として漢に贈った。漢の元封年間（前一一〇年～前一〇五年）、江都王劉建の娘の細君を公主（江都公主）として烏孫に遣わし、昆莫の妻とした。[32] 乗輿（天子の車馬）、衣服など、皇帝の用いる品物を賜り、公主のために属官、宦官、侍者数百人を備えて贈物を送ることは甚だ盛大であった。烏孫の昆莫は、漢の公主細君を右夫人とした。匈奴もまた烏孫に娘を派遣して昆莫に娶せたので、昆莫は匈奴の妻を左夫人とした。

公主（江都公主）の細君は烏孫に到着すると自ら宮室を設けて住み、季節ごとに、一、二回、昆莫と会い、酒宴を催して飲食し、黄金と絹を烏孫王の側近や貴人に授けた。昆莫は老人で言葉も通じないので、公主は哀しみ憂い、自ら歌をつくり、「わが家は、わたしを天の一方に嫁がせ、遠く異国の烏孫の王に託した。天幕を部屋となし、毛氈を壁となし、肉を食べものとし、酪を飲みものとなす。常に憂い悲しみ、故郷を思って心が痛む。願いが叶うならば、黄鵠となって故郷に帰りたい」と言った。武帝は公主の歌を聞いて憐れみ、一年おきに使者を派遣し、帷帳、錦、刺繍を持たせて公主に賜った。

昆莫は年老いたので、孫の岑陬に江都公主を娶らせたいと考えた。しかし公主はこれを聞き入れず、武帝に書状を奉って状況を訴えたが、武帝は公主に答えて「烏孫の風俗に従え。朕は、烏孫とともに匈奴を滅ぼしたいと考えているのだから（烏孫との友好関係を悪化させるわけにはゆかぬのだ）」と言った。（このため公主も武帝の命令に逆らえず、義理の孫との再婚を了承したので）岑陬はついに公主を妻とした。昆莫が亡くなると、岑陬が代わって烏孫王に即位した。岑陬というのは烏孫の官職であり、本名は軍須靡といった。また、昆莫というのは烏孫の王号で、本名は獵驕靡といった。…岑陬は江都公主・細君を娶り、少夫という一人娘を生んだ。

・『資治通鑑』巻二一、漢紀十三、武帝元封六年（前一〇五）条

烏孫の使者は漢が広大であることを見ると、帰国して報告し、ますます漢を尊重するようになった。匈奴は烏孫が漢

と通好したことを聞いて怒り、烏孫を攻撃しようと考えた。また、烏孫の周辺国である大宛、月氏などの諸族もみな漢に仕えるようになったので、烏孫は恐れ、使者を派遣し「漢の公主を娶って兄弟になりたい」と請願した。武帝は群臣と議論し、烏孫への公主降嫁を許可した。烏孫は千頭の馬を（結納品として）連れて来て漢の娘を娶った。漢は江都王劉建の娘の細君を公主となし、行かせて烏孫王の妻とした。贈り物は甚だ盛んで、烏孫王の昆莫は細君を右夫人とした。匈奴もまた娘を烏孫に遣わし、昆莫の妻にしたので、昆莫は匈奴人の妻を左夫人とした。公主細君は自ら宮室を設けて住み、季節ごとに、一、二回、昆莫と会い、酒宴を催して飲食した。昆莫は老人で言葉も通じないので、公主は哀しみ憂い、故郷に帰りたいと思った。武帝はこれを聞くと公主を憐れみ、一年おきに烏孫に使者を派遣して、帷帳、錦、刺繍を公主に賜った。昆莫は「私は年老いた」と言い、孫の岑陬（原文は岑娶）に公主を娶らせたいと考えた。公主は聞き入れず、書状を奉って武帝に状況を訴えたが、武帝が答えて「烏孫の風俗に従え。朕は烏孫とともに匈奴を滅ぼしたいのだ」と言ったので、岑陬はついに公主を妻とした。昆莫が亡くなったので、岑陬が代わって即位し、昆弥（烏孫王）となった。

（三）解憂公主

江都公主の死後、武帝は解憂公主を後妻として降嫁させた。解憂公主は楚王戊[33]（高祖の同母弟劉交の孫）の孫である。解憂公主は三人の烏孫王（岑陬・肥王・狂王）と代々結婚し、約五十年間烏孫に君臨し、政治（狂王の暗殺計画）、戦争（漢・烏孫連合による匈奴攻撃）、外交（漢と烏孫の親善維持）の各分野で漢のために精力的に活動した[34]。また、解憂公主の長男元貴靡は烏孫の大昆弥、次男万年は莎車の王、長女の弟史は亀茲王の妻となり、漢の西域経営を補佐した（系図1参照）。

(1) 岑陬（最初の夫）の治世

・『漢書』巻九六下、西域伝下、烏孫伝

江都公主が亡くなると[35]、漢はまた楚王戊の孫の解憂を公主となし、岑陬の妻とした[36]。岑陬の匈奴人の妻が生んだ泥靡がまだ幼かったので、岑陬は臨終の際、叔父大禄の息子翁帰靡に烏孫を与え、「泥靡が成人したら、烏孫を泥靡に返すように」と言い残した。

(2) 肥王・翁帰靡（二人目の夫）の治世

肥王は、昆莫の次男大禄の息子であったが、岑陬の息子泥靡が幼少であったため、岑陬の遺言に従い、泥靡が成人するまでの間、昆弥となり烏孫を統べた。肥王には匈奴人の妻がおり、烏就屠という息子も儲けていたが、解憂公主と再婚[37]し、漢との親善を強化して匈奴からの独立も画策した。

(a) 肥王との間に誕生した五人の子供達

・『漢書』巻九六下、西域伝下、烏孫伝

翁帰靡は即位すると肥王と称し、また解憂公主を娶り、三男二女を生んだ。長男は元貴靡といい、次男は万年[38]といって莎車（ヤルカンド）の王になった。その次は大楽といって左大将（烏孫の高官）になった。長女の弟史は亀茲（クチャ）の王・絳賓の妻となり、末娘の素光は若呼翎侯の妻となった。

(b) 本始二年（前七二）～本始三年（前七一）、漢・烏孫連合軍による匈奴攻撃[39]

肥王が漢との連繋を強化したので、匈奴は怒り、烏孫を攻撃し、解憂公主の引き渡しを要求した。窮した解憂公主と肥王が宣帝に対し援軍の派遣を要請したので、宣帝は十五万の軍勢を出撃させ、漢と烏孫の軍勢は連合して匈奴討伐を成功させた[40]。

・『漢書』巻八、宣帝紀、本始二年（前七二）条

匈奴が頻繁に辺境地帯に侵攻し、また西では烏孫を攻撃した。烏孫の昆弥と解憂公主は、漢の使者を通じて宣帝に書状を奉り、「昆弥は烏孫の精鋭を出動させて匈奴を攻撃したいと願っています。天子よ、どうか烏孫を不憫と思し召し、漢の軍勢を出動させて公主をお救いください」と言った。そこでこの年（本始二年）の秋…宣帝は、およそ五人の将軍、兵力十五万の騎兵、また校尉の常恵には符節を持たせて烏孫の兵を守らせ、みなに匈奴を攻撃させた。

・『漢書』巻九四上、匈奴伝上

匈奴は使者を烏孫に派遣すると、漢の公主・解憂を差し出すよう要求した。匈奴はまた、烏孫を攻めて車延（クチャ）と悪師（アクス）[41]の地を奪った。烏孫公主の解憂が昭帝に書状を奉って状況を訴えたので、昭帝は公卿に下問し、烏孫の救援について議論させた。しかし議論がまだ定まらないうちに昭帝が崩御し、宣帝が即位した（元平元年＝前七四年）。烏孫の昆弥・肥王はまた宣帝に書状を奉り、「烏孫は絶え間なく匈奴に侵略され、領土を奪われています。それゆえ昆弥は烏孫の兵力の半分となる精鋭の人馬五万匹を出動させ、力を尽くして匈奴を攻撃したいと存じます。天子よ、どうか漢の軍勢を出動させて、公主を哀れみ、お救いください」と言った。そこで、本始二年（前七二）、漢は大々的に函谷関より東の軽装の精鋭を出動させた。

・『漢書』巻九六下、西域伝下、烏孫伝

昭帝の時、解憂公主は書状を奉り、「匈奴が騎兵を出動させて車師で狩りを行い、車師と匈奴が協力し、連合して烏孫に侵攻しています。天子よ、どうか、この事態をお救いください」と言った。漢は兵士と軍馬を養い、匈奴攻撃について議論しようとしたが、このとき昭帝が崩御してしまった。（このため匈奴攻撃についての議論は止んだ）。そこで宣帝が初めて即位したとき、解憂公主と昆弥（肥王）は、双方ともに使者を派遣して宣帝に書状を奉り、「匈奴がまた立て

続けに大軍を出撃させて烏孫を攻撃し、侵攻しております。車延、悪師の地を奪い取り、人民を捕えて匈奴に連れ帰りました。また、使者を烏孫に派遣し、公主を匈奴に連れてくるよう促し、漢と烏孫との間を隔絶しようとしております。昆弥は烏孫の精鋭の半数を出動させ、自らで五万の騎兵を揃え、力を尽くして匈奴を攻撃しようと願っております。天子には、どうか漢の軍勢を出撃させて公主と昆弥をお救いください」と言った。そこで漢は大々的に十五万の騎兵を出動させ、五人の将軍がそれぞれ別の道を通って同時に出撃した。詳細については『漢書』匈奴伝に記した。宣帝は校尉の常恵を派遣し、符節を持たせて烏孫の軍勢を守らせ、昆弥は自ら翎侯以下の五万の騎兵を率いて西方より匈奴の領内に侵入し、右谷蠡王[42]の天幕に到達して、単于の父の排行のもの、単于の兄嫁、居次（単于の娘）、名王、犂汙都尉、千長、騎将以下の四万人の首級、それに、馬、牛、羊、驢（ロバ）、橐駝（ラクダ）七十万頭あまりを獲得した。烏孫は、捕虜とした者と獲得した物をすべて自分の物とした。漢の軍勢が帰還すると、宣帝は常恵を長羅侯に封じた。この年は本始三年（前七一）であった。漢は常恵を派遣し、黄金と絹を持たせて、功績のあった烏孫の貴人達に賜らせた。

（c）元康二年（前六四年）、元貴靡への少主・相夫の降嫁とその中止

肥王が、解憂公主との間に生まれた長男元貴靡（漢の外孫）を後継者にするので公主を妻として賜わりたいこと、公主が降嫁すれば匈奴に叛くことを申し出たので、宣帝は少主（解憂公主の弟の娘相夫）を元貴靡に降嫁させることにした。少主の降嫁は結局中止となるが、宣帝が烏孫への公主降嫁を認めたことは重要であるのでここに取り上げる。

・『漢書』巻九六下、西域伝下、烏孫伝（『資治通鑑』巻二六、神爵二年（前六〇）条にもほぼ同文があるが省略）

元康二年（前六四年）、烏孫の昆弥は常恵を通じて宣帝に書状を奉り、「漢の外孫の元貴靡を後継ぎとなし、再度、漢の公主を娶らせて漢と婚姻を結んで和親を重ね、匈奴に叛き、関係を絶つことができますよう、お願い申し上げます。また、馬と贏（ラバ）をそれぞれ千頭、結納品として漢にお納め致します」と言った。宣帝が勅書を下し、公卿に議論

させたところ、大鴻臚の蕭望之は、「烏孫は絶域にある国家であり、異変や事故もあるため、確保しておくことは困難です。それゆえ烏孫への再度の公主降嫁を許可すべきではありません」と言った。しかし、宣帝は烏孫が新たに大きな軍功を立てたこと[43]を喜び、また、これまで烏孫との間で親しく結ばれた婚姻関係を絶つことを重大視して、使者を烏孫に派遣し、烏孫の献上した結納品を受け取らせた。昆弥、太子、左右の大将、都尉達がみな、漢に対して使者を派遣し、およそ三百人あまりが漢に入国し、少主を娶るために迎えに来た。そこで宣帝は、烏孫公主の解憂の弟の娘相夫を公主となし、属官や侍者百人あまりを置いて上林苑（長安南の大庭園）の中で烏孫の言葉を習得させた。宣帝は自ら平楽観に出向くと、匈奴の使者、外国の君長を集め、角抵（すもう）の競技会を大々的に開催し、音楽の席を設けて少主を見送った。長羅侯・光禄大夫の常恵を副官となし、符節を持つものはおよそ四名、少主を送って敦煌まで行った。しかし、まだ塞を出ないとき、烏孫の昆弥・翁帰靡（肥王）が亡くなり（神爵二年[44]、前六〇年）、烏孫の貴人達がともに先代の烏孫王・岑陬と交わした本来の約束[45]に従って岑陬の息子の泥靡を擁立し、翁帰靡に代わって昆弥となして狂王と称したことが伝わった。そこで常恵は宣帝に書状を奉り、「少主様を敦煌に留め、恵は馬を馳せて烏孫にまいり、元貴靡様を烏孫王に推戴しないことを叱責してから敦煌に戻り、少主様を烏孫に迎えます」と言った。宣帝がこのことを公卿に下問して議論させたところ、蕭望之がまた、「烏孫は二心を抱いており、約定を結ぶことは困難です。先の解憂公主は烏孫に嫁いでから四十年あまり経つにもかかわらず、烏孫王との恩義も愛情も親密ではありませんし、辺境地帯はいまだに安寧を得ておりません。これらのことがすでに証しでございます。いま、少主が、元貴靡が推戴されなかったことを理由に長安に帰還したとしても、信義の上で夷狄に背きませんから漢にとっては福でしょう…」と言った。そこで宣帝は蕭望之の意見に従い、少主を召して長安に帰還させた。

（3）狂王・泥靡（三人目の夫）の治世

神爵二年（前六〇）肥王が死去し、狂王が即位すると、解憂公主は狂王と再婚した。[46] 狂王は匈奴系の王であり（系図1参照）、解憂公主とは不和で、乱暴な王でもあったので、公主は漢の使者達と共謀して狂王の暗殺を画策した。

（a）解憂公主による狂王暗殺未遂事件

・『漢書』巻九六下、西域伝下、烏孫伝

狂王の泥靡は、また楚の解憂公主を娶り、鴟靡という一人の男の子を生んだ。しかし狂王と解憂公主は仲が悪く、また狂王は乱暴非道な人柄であったので、人望を失った。漢は衛司馬の魏和意と副官の任昌を烏孫に派遣し、烏孫人の侍子を送って烏孫に帰国させた。解憂公主は彼らに対し、「狂王は烏孫人にとって憂いであり苦しみでありますから、容易に誅殺できるでしょう」と言った。そこで魏和意は解憂公主と共謀して酒宴の席を設け、宴会が終わるや、士に剣を抜かせて狂王を攻撃させた。しかし剣がそれて落ち、狂王は手傷を負いながらも馬に乗って走り去った。狂王の息子の細沈瘦は兵士を集め、魏和意と任昌、それに解憂公主を赤谷城に包囲した。数ヶ月かかって西域都護の鄭吉が西域諸国の軍勢を出動させて解憂公主らを救出したので、細沈瘦は包囲を解いて撤退した。漢は、中郎将の張遵に医薬を持たせて烏孫に派遣し、狂王を治療させ、黄金二十斤、綵を下賜した。それから魏和意と任昌を捕え、鎖でつないで尉犂（イリ）より檻車に乗せて長安に護送し、斬刑に処した。車騎将軍の長史張翁は烏孫に留まり、解憂公主と使者が狂王の謀殺を画策したことについて尋問したが、解憂公主は罪に服さず、叩頭して謝罪した。張翁は、解憂公主の頭をつかんで罵倒した。解憂公主が宣帝に書状を奉って（張翁の無礼を）訴えたので、張翁は長安に帰還後、死罪になった。

・『資治通鑑』巻二七、漢紀十九、宣帝甘露元年（前五三）条

烏孫の狂王はまた楚の公主解憂を娶り、一人息子の鴟靡を生んだが、公主との仲は悪く、乱暴非道な性格で人望を

失った。漢は、衛司馬の魏和意と副使の任昌を烏孫に派遣した。解憂公主は「狂王は烏孫の憂いと苦しみであるので、誅殺するのは容易でしょう」と言った。そこで、ついに策略を練って酒宴を設け、士に剣を抜かせて狂王を討たせた。しかし剣がそれて落ち、狂王は傷つきながらも馬に乗って走り去った。狂王の息子の細沈瘦は兵士を集め、魏和意と任昌、解憂公主を赤谷城に包囲した。数ヶ月がかりで西域都護の鄭吉が西域諸国の軍勢を出動させて公主らを救出したので、細沈瘦は包囲を解いて撤退した。

(b) 甘露元年[47]（前五三）、解憂公主の侍女馮嫽の活躍

解憂公主の侍女馮嫽は公主の名代として西域諸国に派遣されたこともあり、外交官として活動した。また、烏就屠の乱[48]の際、烏就屠を説得して内訌の激化を回避した。

・『漢書』巻九六下、西域伝下、烏孫伝

初め、楚の解憂公主の侍女の馮嫽は史書に通暁し、西域の事情[49]にも明るく、かつて漢の符節を持って解憂公主の使者として西域の城郭諸国に賞賜を行ったこともあったので、西域諸国からも尊敬と信頼を得て馮夫人と称された。馮夫人は烏孫の右大将の妻であり、右大将は烏就屠と愛しあっていたので、西域都護の鄭吉は馮夫人に烏就屠を説得させた。馮夫人が烏就屠に対し、「漢の軍勢が出撃しようとしています。そうなれば、あなたは滅ぼされるに違いありません。漢に降伏するのが良計です」と言ったので、烏就屠は恐れ、「わたしの望みは小昆弥の称号を得ることだ」と言った。宣帝は馮夫人を長安に呼び寄せ[50]、自ら烏孫の情勢をたずねると、謁者の竺次を烏孫に派遣することとし、期門の甘延寿を副使となして馮夫人を烏孫まで送らせた。馮夫人は錦の衣で飾った車に乗り、漢の符節を持ち、烏就屠に勅書を下して、長羅侯・常恵のいる赤谷城に呼び寄せ、元貴靡を大昆弥となし、烏就屠を小昆弥となして、みなに印綬を賜った。

（4）甘露三年（前五一年）、解憂公主の帰国

解憂公主は甘露三年、宣帝に帰国を請願し、許されて長安に帰還した。[51] なお、公主が帰国を許された甘露三年正月、匈奴の呼韓邪単于が入朝し漢に帰順した。烏孫への公主降嫁は漢と烏孫の対匈奴のための同盟であったので、宣帝も呼韓邪の臣従をもって解憂公主の任務も達成されたと判断し、帰国を許可したと考えられる。

・『漢書』巻八、宣帝紀、甘露三年（前五一）条

甘露三年の冬、烏孫公主の解憂が帰国した。

・『漢書』巻九六下、西域伝下、烏孫伝

元貴靡や鴟靡がみな病死したので、解憂公主は宣帝に書状を送り、「わたくしは年老いて、故郷を思うことは切実でございます。叶うことならば、せめて骨を帰して漢の地に葬られとうございます」と言った。宣帝は解憂公主を憐れに思い、漢に迎えることにした。公主は男女三人の孫とともに長安に戻った。この年は甘露三年（前五一）であった。このとき公主の年齢は七十歳に近く、宣帝は解憂公主に対し田宅、奴婢を賜るなど、たいそう手厚く奉り、養った。朝見の儀礼は、公主の儀礼に準じた。解憂公主は漢に帰国してから二年後に亡くなり、三人の孫が漢に留まって解憂公主の墳墓を守ったという。

・『資治通鑑』巻二七、漢紀十九、宣帝甘露三年（前五一）条

烏孫の大昆弥の元貴靡、鴟靡がみな病死した。解憂公主は宣帝に書状を送り、「年老いて故郷を懐かしく思っております。骨を帰して漢の地に葬られとうございます」と言った。宣帝も解憂公主を憐れみ、漢に迎えることにした。甘露三年冬、解憂公主は長安に到着した。待遇は公主の制度と同様であった。この二年後に解憂公主は亡くなった。

四、鄯善王・尉屠耆に降嫁した宮女【第二段階】

昭帝は元鳳四年[52]（前七七）尉屠耆を鄯善王に擁立し、宮女を妻として授けた。鄯善（旧名楼蘭）は西域南道の東端にあり、漢にとって西域の入口となる要衝であったが、楼蘭王安帰（尉屠耆の兄）は匈奴の傀儡で、漢の使者を妨害・殺害した。そこで漢は安帰を暗殺し、長安に人質として滞在していた尉屠耆を漢の傀儡として擁立したのである。[53]

・『漢書』巻九六上、西域伝上、鄯善国伝

昭帝は、尉屠耆を擁立して（楼蘭の）王となすと、楼蘭の国名を鄯善と改め、尉屠耆のための印章を刻み、宮女を賜って尉屠耆の夫人とした。そして、尉屠耆のために、車騎（車馬）や輜重（旅の荷物）を備えさせると、丞相や将軍達に百官を率いて横門（長安城北にある西の第一門）の外まで行かせて尉屠耆を見送らせ、旅立ちにあたり、道祖神を祭って旅路の無事を祈り、鄯善に派遣した。

五、亀茲（クチャ）に降嫁した弟史（解憂公主の長女）【第二段階】

解憂公主の長女の弟史は地節四年（前六六）亀茲王の絳賓の妻となり、亀茲を親漢となし、漢文化を亀茲に伝えることにも貢献した。弟史は元康元年（前六五）入朝し、宣帝から正式に公主の称号も賜っているので、弟史も和蕃公主と見なし[54]取り上げる。

・『漢書』巻九六下、西域伝下、渠犂伝

烏孫公主の解憂が長女の弟史を漢に行かせ、長安で琴の弾奏を習わせていた。漢が侍郎の楽奉を派遣し解憂公主の娘弟史を烏孫に送らせたが、その際、亀茲を通過した。亀茲王は以前、人を派遣して烏孫に行かせ、「解憂公主の娘を妻に迎えたい」と請願したが、その時にはまだ公主の娘弟史は漢から烏孫に帰国していなかった。たまたま解憂公主の娘

弟史が亀茲を通過したので、亀茲王は弟史を留めて烏孫に帰らせず、また使者を烏孫に派遣し解憂公主に告げた。そこで解憂公主は、娘を亀茲王に嫁がせることを許した。その後、解憂公主は宣帝に書状を奉り、「娘の弟史を漢王室の公主として入朝させてください」と請願した。亀茲王の絳賓も夫人を愛していたので宣帝に書状を奉り、「漢の外孫を娶り、陛下と兄弟になることができましたので、解憂公主の娘とともに入朝できますよう、お願い申し上げます」と請願した。元康元年（前六五）、亀茲王の絳賓と夫人の弟史は、ついに来朝した。王と夫人は、そろって宣帝から印綬を賜った。夫人の弟史は公主を称し、車騎（車馬）、旗鼓（旗と太鼓）、歌手や笛吹きを数十人、綺繡（あやぎぬ）、雑繒（様々な絹）、珍奇な物など、およそ数千万を宣帝より賜った。宣帝は亀茲王夫妻を一年間漢に滞在させてから、手厚く贈物を授けて帰国させた。その後、亀茲王の絳賓は頻繁に朝貢し、漢の衣服や制度を好み、帰国すると宮室を造り、見回りの道を作って宮殿の周囲を守り、室内に出入りする際には伝呼を行い、鐘や太鼓を鳴らし、漢王室の儀礼に則った。…絳賓が亡くなると、息子の丞徳が漢の外孫を自称し、成帝、哀帝の時に最も頻繁に往来したので、漢も丞徳をたいそう親密にもてなした。

・『資治通鑑』巻二五、漢紀十七、宣帝地節四年（前六六）～元康元年（前六五）条

地節四年…烏孫公主・解憂の長女弟史を亀茲王・絳賓の夫人とした。絳賓は宣帝に書状を奉り、「漢の外孫を娶ることができましたので、解憂公主の娘とともに入朝できますよう、お願い申し上げます」と言った。元康元年亀茲王と夫人が来朝したので、宣帝は、みなに対して印綬を賜り、亀茲王の夫人を号して公主と称させた。賞賜はたいそう手厚かった。

六、匈奴に降嫁した王昭君【第三段階】

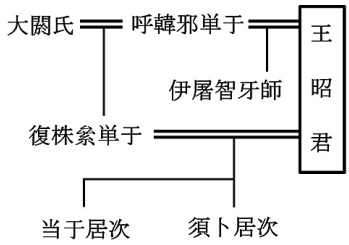
・『漢書』巻九、元帝紀、竟寧元年（前三三年）条

竟寧元年（前三三年）春正月、呼韓邪単于が来朝した。元帝は勅書を下し「…呼韓邪単于は漢の恩徳を忘れず、礼儀を慕い、いままた入朝して新年祝賀の礼を修めた。朕は国境の塞を確保して永遠に伝え、辺境地帯に長く戦争のないことを願う。ここに元号を改めて竟寧となし、呼韓邪単于に対して、後宮で勅命を待つ[55]宮女の王嬙[56]を賜い、閼氏となす」と言った。

・『漢書』巻九四下、匈奴伝下

竟寧元年（前三三年）、呼韓邪単于は三度目の入朝をした。元帝からの礼遇と賜わり物は最初の入朝のとき（甘露三年＝前五一）と同じであったが、衣服、錦、絹、絮（綿）を増加して、みな黄龍年間（前四九年）の（二度目の入朝の）ときの二倍とした。呼韓邪単于は自ら請願して、「漢王室の婿になって、皇帝の親戚になりとうございます」と言った。そこで元帝は、後宮にいる良家の娘、王嬙、字を昭君という女性を呼韓邪単于に賜った。…王昭君は寧胡閼氏（匈奴を安んじる妃）[57]と称し、伊屠智牙師という一人の男の子を生んだ。伊屠智牙師は右日逐王[58]となった。…呼韓邪単于が亡くなると、息子の雕陶莫皋[59]が即位して復株累若鞮単于となった。…復株累単于は、また王昭君を妻とし、二人の女の子を生んだ。長女を須卜居次[60]といい、末娘を当于居次[61]といった。

【系図２】王昭君と夫・子供達



・『後漢書』巻八九、南匈奴伝

初め、単于（呼都而尸単于）[62]の弟の右谷蠡王[63]伊屠知牙師が、順位[64]の上から左賢王になるべき人物であった。左賢王は、単于の後継者である。しかし、呼都而尸単于は自分の息子

に単于の位を継承させたかったので、ついに伊屠知牙師を殺害した。

伊屠知牙師は、王昭君の息子であった。王昭君は字を嬙といい、南郡（湖北省）の出身であった。かつて前漢の元帝時代、良家の娘であったため選ばれて後宮に入った。このとき呼韓邪単于が入朝したので、元帝は勅書を下し「後宮の宮女五名を呼韓邪単于に賜る」と言った。王昭君は、後宮に入ってから数年たっても元帝にお目にかかることができず、悲しみと憤りを募らせていたので、後宮を管轄する掖廷令に対し、「匈奴に行きたい」と請願した。呼韓邪単于が匈奴に帰国する際、別れの挨拶をするための大宴会が開催されたので、元帝は五名の宮女達を宴席に召して呼韓邪単于に見せた。王昭君の豊かな風貌は、あでやかで美しく、漢の宮殿を光り輝かせた。王昭君が振り向きながらそぞろ歩くと、まわりにいる者たちは昭君の美貌に心を奪われ、わなないた。元帝は王昭君を見てたいそう驚き、後宮に留まらせたいと思ったが、信義を失うわけにもいかず、ついに王昭君を匈奴に与えた。王昭君は二人の子を生んだ。呼韓邪単于が亡くなると、前閼氏の息子が代わって単于に即位し、王昭君を妻にしたいと願った。王昭君は成帝に書状を奉って帰国を願ったが、成帝は勅書を下し、王昭君に対し匈奴のレヴィレート婚の婚姻習俗に従うよう命令した。このため王昭君は、ついに、また次の単于（復株累単于）の閼氏となった。

・**『資治通鑑』巻二九、漢紀二一、元帝竟寧元年（前三三）条**

竟寧元年（前三三）春正月、匈奴の呼韓邪単于が来朝し、自ら漢王室の婿になって（皇帝の）親戚になりたいと請願した。元帝は、後宮にいる良家の娘の王嬙、字を昭君という女性を呼韓邪単于に賜った。…呼韓邪単于は王昭君に称号を授けて寧胡閼氏となし、一人息子の伊屠智牙師を生み、右日逐王とした。

・**『資治通鑑』巻三十、漢紀二二、成帝建始二年（前三一）条**

呼韓邪単于が亡くなり、雕陶莫皋が即位し復株累若鞮単于となった。…復株累単于もまた王昭君を妻となし二人の娘

を生んだ。長女を須卜居次といい、次女を当于居次といった。

注

（1）漢代和蕃公主研究には王桐齢「漢唐之和親政策」（『史学年報』第一期、一九二九年）、藤野月子「漢唐間における和蕃公主の降嫁について」（『史学雑誌』一一七編七号、二〇〇八年）、佐々木満実「漢代和蕃公主考―「和親」との関係を中心に」（『お茶の水史学』五四号、二〇一〇年）、藤野月子『王昭君から文成公主へ』（九州大学出版会、二〇一二年）、拙稿「烏孫への和蕃公主の外交活動と漢の対外政策―江都公主・解憂公主・侍女馮嫽の活動の記録」（『総合女性史研究』三四号、二〇一七年）、黎虎著・村井恭子訳「和親女性の常駐使節としての機能―漢代を中心に」（『神戸大学史学年報』三六号、二〇二一年）等がある。

（2）拙稿「唐代和蕃公主に関する諸史料の訳注―『旧唐書』『新唐書』『資治通鑑』より」（『京都女子大学大学院文学研究科研究紀要・史学編』二三号、二〇二四年）、拙稿「隋代和蕃公主に関する諸史料の訳注―『隋書』『周書』『旧唐書』『新唐書』『資治通鑑』より」（『立命館東洋史学』四七号、二〇二五年）。

（3）匈奴に嫁した公主の出自は記されていない。その理由を藤野月子氏は、漢が匈奴との和親を屈辱的と見なしたことにあると考察。注（1）藤野著書三九～四一頁。

（4）烏孫への公主降嫁については、注（1）拙稿参照。なお、黎虎氏は解憂公主の活動を漢の制度に照らして分析し、公主が常駐使節の機能を持っていたと論考した。注（1）黎虎論文。

（5）宮女を単于に授けたことについて、沢田勲氏は、漢は単于に与える女性を格下げすることで、匈奴が漢に服従したことを示したと推察。沢田勲『匈奴〔新訂版〕』（東方書店、二〇一五年〔初版一九九六年〕七五頁）。鶴間和幸氏は、王昭

君は劉氏皇帝の後宮に入った者であるから、その降嫁も漢室との正式な婚姻であると指摘する。鶴間和幸『ファーストエンペラーの遺産・秦漢帝国　中国の歴史・第三巻』（講談社、二〇〇四年、二八四頁）。

（6）長沢和俊『楼蘭王国史の研究』（雄山閣出版、一九九六年）、注（1）佐々木論文。

（7）注（1）拙稿十五～十六頁参照。

（8）紀元前一三三年（元光二）軍臣単于が交易のために到来した際、武帝は馬邑城で要撃を試みたが、軍臣単于がこれを察知して逃亡したため計画は失敗した。この事件を契機に匈奴の入寇が激化し、漢と匈奴は戦争状態となった。注（5）沢田著書四二頁参照。

（9）匈奴の西部地域を管轄する日逐王が、僮僕都尉を西域諸国に派遣し徴税していた。

（10）『史記』『漢書』の翻訳として、小川環樹・今鷹真他訳『史記列伝』全五巻（岩波文庫、一九七五年）、小竹文夫・小竹武夫訳『史記』全八巻（ちくま学芸文庫、一九九五年）、小竹武夫訳『漢書』全八巻（ちくま学芸文庫、一九九七年～一九九八年）などがある。また、『史記』『漢書』の匈奴伝の訳注に内田吟風訳注「匈奴伝（史記・漢書）」（『騎馬民族史1・正史北狄伝』平凡社、一九七一年）、『後漢書』南匈奴伝の訳注に内田吟風「訳注・後漢書南匈奴伝」（『北アジア史研究・匈奴篇』同朋舎、一九七五年）がある。

（11）『史記』巻一一〇匈奴伝に「匈奴では、父親が死ぬと継母を娶り、兄弟が死ぬと、みなその妻を娶った」とある。烏孫の風俗については『漢書』巻九六下西域伝下烏孫伝に「烏孫の風俗は匈奴の風俗と同じであった」とあるので、烏孫も匈奴と同様に、父兄の死後、継母や兄嫁を娶った。

（12）劉敬の公主降嫁提言の時期については『史記』『漢書』には記述はなく、『資治通鑑』巻十二、高帝八年（前一九九）条に劉敬の提言が記されている。

（13）冒頓単于の在位は前二〇九年～前一七四年。注（5）沢田著書六三頁の表。

（14）『史記』匈奴伝、『漢書』巻四三婁敬（劉敬）伝では兵数を四十万とする。沢田勲氏は、白登山の戦いの時の匈奴軍が東西南北の四方にいたので、一方角につき十万で計算し四十万としたと考察する。沢田勲『冒頓単于』（山川出版社、二

○一五年、四八頁）。

（15）『漢書』巻九四匈奴伝上の顔師古の注に「閼氏は匈奴の皇后の称号である」とある。

（16）高祖と冒頓単于との間で和親は二度結ばれた。第一次和親は白登山の戦い（前二〇〇年）の直後に結ばれ、互いの領土を侵犯しないという簡単な条約内容であった。第二次和親（前一九八年）では公主降嫁や歳幣が決まり、漢皇帝と匈奴単于が兄弟の盟約を締結した。注（14）沢田著書四九～五〇頁。

（17）老上単于の在位は前一七四年～前一六〇年。注（5）沢田著書六三頁の表。

（18）原文は「後四年」であるが、内田吟風氏は、これを「文帝の後元四年」と解釈した。注（10）内田訳注「匈奴伝（史記・漢書）」六五頁。本稿も内田氏の考証に従う。

（19）軍臣単于の在位は前一六〇年～前一二六年。注（5）沢田著書六三頁の表。

（20）「故約」とは、前一九八年の第二次和親を指す。注（16）参照。

（21）張騫の建策は『史記』巻一二三大宛伝、『漢書』巻六一張騫伝、巻九六烏孫伝、『資治通鑑』巻二十、武帝元鼎二年（前一一五）条に記されているが、時期については『史記』『漢書』に記載がないので、『資治通鑑』に従い元鼎二年（前一一五）とする。なお、『史記』大宛伝、『資治通鑑』の翻訳は省略する。

（22）『史記』巻一二三大宛伝では「渾邪王の故地」と記される。渾邪王の旧領は『漢書』巻二八地理志によれば張掖郡に相当する。なお、渾邪王は紀元前一二一年、漢に投降した。これにより漢は河西地区の領有権を獲得した。注（5）沢田著書四六頁参照。

（23）『史記』大宛伝に記載された張騫の建策では、漢と烏孫が兄弟となることしか進言しておらず、公主を烏孫王の妻となすことについては提言していない。

（24）西域は東西交易の要衝なので、匈奴は西域諸国に課税し経済基盤とした。注（9）参照。それゆえ「匈奴の右臂を断つ」とは、西域を匈奴から奪取し、軍事的にも経済的にも匈奴を追いつめることを指す。小谷仲男「遊牧民族の右臂を断つ理論―中国正史西域伝の訳注序説」（『内陸アジア史研究』二七号、二〇一二年）参照。

(25) 昆莫、大禄（昆莫の次男）、岑陬（早世した昆莫の長男〔太子〕の息子）の三勢力に分立していた。じつは、昆莫が長男の遺言（息子の岑陬を太子にすること）を認めたところ、大禄が反乱を起こし岑陬攻撃を画策したので、昆莫は岑陬に騎兵一万余を授けて別居させ、自らも騎兵一万余で武装し異変に備えていた（『漢書』烏孫伝による）。

(26) 劉建は元狩二年（前一二一）謀反を図り、自殺した。『漢書』巻六武帝紀による。

(27) 『漢書』巻五三景十三王伝、江都易王劉非伝。

(28) 江都公主の降嫁年を王明哲氏は「元封三年（前一〇八）」と考証する。王明哲、王炳華『烏孫研究』（新疆人民出版社、一九八三年）一五六頁年表。

(29) 沢田勲氏は、匈奴の左夫人の方が細君よりも上位と指摘。注（5）沢田著書七一頁。

(30) 岑陬は、昆莫の太子だった長男の息子。系図1参照。

(31) 江都公主が岑陬と再婚した年代は不明であるが、王明哲氏は「元封末年（前一〇五年頃）」と考証。注（28）王著書一五六頁年表。

(32) 注（28）参照。

(33) 楚王の劉戊は前一五四年、呉楚七国の乱を起こすが、漢に敗北し自殺した。『史記』巻十一孝景帝紀、巻五十楚元王世家、『漢書』巻五景帝紀による。

(34) 注（1）拙稿参照。

(35) 江都公主の没年は不明だが王明哲氏は「太初二年（前一〇三）頃」と考証。注（28）王著書七八頁、一五六頁年表。

(36) 解憂公主の降嫁年は不明だが王明哲氏は「太初二年（前一〇三）頃」とする。注（28）王著書七四頁、七九頁、一五六頁の年表。

(37) 岑陬の没年、肥王の即位年、解憂公主と肥王の再婚年代は不明であるが、王明哲氏は「太始年間（前九六～前九三）」と考証する。注（28）王著書一五六頁の年表。

(38) 『漢書』巻九六上西域伝上莎車国伝参照。

(39) 漢・烏孫連合軍の匈奴攻撃は『漢書』宣帝紀、匈奴伝、烏孫伝、『資治通鑑』巻二四、宣帝本始二年（前七二）条に記されている。ただ『資治通鑑』は『漢書』匈奴伝・烏孫伝の記事を年代に沿ってまとめており、ほぼ同文なので翻訳は省略する。

(40) 漢・烏孫連合軍の匈奴討伐が成功すると、匈奴に服属していた丁令・烏桓なども匈奴を攻撃したので、匈奴では飢饉の悪影響も加わって、人民の十分の三、家畜の十分の五が死んだと言う。『漢書』匈奴伝上による。

(41) 車延と悪師の地名は、注（10）内田訳注「匈奴伝（史記・漢書）」九十頁に従った。

(42) 右谷蠡王は匈奴の大臣で、四角という高官の一つ。単于の子弟で将来単于になる者が就任した（『後漢書』巻八九南匈奴伝による）。なお、右谷蠡王は、匈奴の西方領域北部を支配した。注（5）沢田著書一四〇～一四二頁参照。

(43) 本始三年（前七一）烏孫の肥王が漢と連合して匈奴を攻め、単于の一族など四万人を殺し、牛馬など七十余万を捕獲する大戦果を挙げたことを指す。

(44) 『漢書』巻七八蕭望之伝によれば、肥王の死去年は神爵二年（前六〇）である。なお、肥王が亡くなった神爵二年、西域を統轄する日遂王が漢に投降したので、漢は西域都護を設置し、匈奴の反撃に備えた。肥王の急死と西域都護の設置が同年（前六〇年）であることから、手塚隆義氏は漢が肥王の死に対応するため西域都護を設置したと考察した。手塚隆義「烏孫の国内事情と西域都護の成立」（『史苑』一四巻一号、一九四一年）。

(45) 岑陬が肥王に譲位した際に言った「泥靡が成人したら烏孫を返すように」との遺言。

(46) 解憂公主と狂王の再婚年代を王明哲氏は「神爵二年（前六〇）」と考証。注（28）王著書一五八頁年表。

(47) 『漢書』烏孫伝には年代の記述はないが、『資治通鑑』巻二七、宣帝甘露元年（前五三）条に同文が見えるので、この年の事例とした。

(48) 烏就屠が「母の実家匈奴の援軍が来る」と称して烏孫の人心を掌握し、狂王を殺して即位したので、宣帝は烏就屠討伐の軍勢を出動させた。『漢書』烏孫伝による。

(49) 『漢書』烏孫伝の原文に「習事」とある。この「習事」を王明哲氏は「習西域城郭諸国事」の省略であると解釈する。

注（28）王著書九六頁、注一二四。

（50）馮嫽が烏孫と長安の間を往復したことを示す木簡が、敦煌（甘粛省）の東約六〇キロにある漢代の駅伝施設懸泉置の遺跡から出土している。小谷仲男「敦煌懸泉漢簡に記録された大月氏の使者」（『史窓』七二号、二〇一五年）。

（51）甘露三年（前五一）長安に帰還する解憂公主を護衛するよう命令書が発布されたことを記す木簡も懸泉の駅伝遺跡から出土している。注（50）小谷論文。

（52）昭帝が尉屠耆に宮女を夫人として賜ったことは『資治通鑑』巻二三、昭帝元鳳四年（前七七）条にも記されるが、『漢書』鄯善伝と同文なので翻訳は省略する。

（53）『漢書』鄯善伝による。注（6）長沢著書も参照。

（54）注（1）拙稿参照。

（55）原文は「待詔掖廷」であり、應劭の注には「王檣は郡国が献上した女であったが、元帝にまだお目にかかったことがなかったので、後宮で命令を受ける必要があった。それゆえ、待詔（勅書を待つ）と言ったのである」と見える。

（56）應劭の注に「王檣は王氏の娘で、名を檣、字を昭君といった」とある。また、文穎の注に「王檣はもともと南郡の秭帰（湖北省秭帰県）の人であった」とある。

（57）『漢書』巻九四下匈奴伝下の顔師古の注に「匈奴人は王昭君を得ると、匈奴に安寧をもたらすと考え、昭君を寧胡閼氏と称した」とある。

（58）右日逐王は匈奴の大臣で、六角という高官の一つであり、単于の子弟で将来単于になる者が就任した。『後漢書』南匈奴伝。注（5）沢田著書参照。

（59）雕陶莫皋は、呼韓邪単于と大閼氏（呼衍王の次女）の間に生まれた長男。最年長であったので、呼韓邪単于の死後、単于に即位した。『漢書』匈奴伝下による。

（60）匈奴の大臣須卜当の妻なので須卜居次と呼ばれた（『漢書』匈奴伝下の顔師古の注に「須卜は夫の家の氏族である」とある）。居次は、匈奴の王女のこと（『漢書』匈奴伝下の李奇の注に「居次は女性の称号で中国の公主のようなもの」と

ある）。なお、須卜居次は王莽と連繋し、新・匈奴間の和平交渉を取り持ち、夫の須卜当とともに烏累単于も擁立し、政治・外交において活躍した。拙稿「王莽期の匈奴対策における王昭君一族の外交的活動」（『総合女性史研究』四〇号、二〇二三年）参照。

(61) 当于氏の妻なので当于居次と呼ばれた（『漢書』匈奴伝下の顔師古の注に「当于は夫の家の氏族である」とある）。当于氏は匈奴の婚姻氏族。注（14）沢田著書六八頁。

(62) 呼韓邪単于と第五閼氏の息子。『漢書』匈奴伝下による。

(63) 右谷蠡王については注（42）参照。

(64) 呼韓邪単于が単于位の兄弟相続を遺言したので、呼韓邪の息子達は代々弟に位を譲っていた（『漢書』匈奴伝下による）。